

久住山 (1787m) と中岳 (1791m)



久住山に登るのは 1986 年と 2008 年に続いて 3 回目である。最初は 100 名山の 96 山目として、次は、その隣にある中岳(1791m)の方が高いということが後からわかったので登り直しに行ったときである。今回は由布岳(200 名山)と鶴見岳(300 名山)が同じツアーに入っていたから登ることになった。なんでかいつもついで感がある。でももちろんそんな適当な山ではない。この日は日曜日であったので多くの登山客がいた。我々が登って行くと、すれ違う多くの下山客が待ってくれる。道は十分広いのに。小学校からの教育が良いのであろうか。

中岳は 1987 年くらいの 5 万分の一の国土地理院の地図では山名と標高は乗っていなかったと思う。もしかしたら深田久弥も中岳の存在に気が付いていなかったかもしれない。まあ深田久弥は山の高さだけでその風格を決める人ではなかったので、バカにすんなよと言われるかもしれない。万歩計は 23681 歩。朝羽田をたったにしてはキツイ。





**平治岳**（ひじだけ：1643m）と**大船山**（1786m）

今までの九重連峰では平治岳は無視していた。山名からして地味である。高さも魅力がない。しかし登って見たらケツコウキツイ岩場などもあってついで山ではない。ミヤマキリシマが満開というところが救いであった。

大船山は1986年くらいの時は焼き畑農業が行われており、武田側に降った時には焼け残った竹のヤニがズボンを台無しにしてしまっていたことがあった。今は焼き畑は行われていないということだ。月曜日の割には登山客が多かった。この日の万歩計は35449歩。

九州の山のガイドはいつも決まって尾方さんである。熊本飛行場で向こうから挨拶してきた。これで3回目である。まいたびのツアーリーダーは岩場女の上野さん。

ツアー客の中には知った顔はいないと思ったのであるが、同室になったSラビさんが俺の年期の入ったザックに見覚えがあるという。話をしているうちに、多分北海道の羊蹄山の時に会ったと思われる。男が6人、女が5人であった。



ミヤマキリシマ群落

## 由布岳 (1583m) と鶴見岳 (1375m)

私にとって今回の山の目的は、すでに登っている久住山や大船山ではなく、由布岳(200名山)と鶴見岳(300名山)であった。

大船山から見る由布岳は双耳峰のなかなか見事な山である。東峰(1580m)と西峰(1583m)から成るが、西峰は岩峰であり、かつてマイタビでは入院を要する事故を起こしたことがあるらしく、今回は東峰のみとなった。大したことなかろうと踏んでいたの

であるがケッコウ手ごたえがあった。なぜ双耳峰のような形が生まれるのかネットで検索してみたが答えは無かった。他には北アルプスの鹿島岳や谷川岳が有名であるが、双耳峰生成の由来を知りたいところである。

鶴見岳はロープウエーで行き還りしたので、30分も歩かないのにこれで300名山一つとすることがちょっと恥ずかしい。山頂付近には弁財天などたくさんの神様が祭られていたり、ミヤマキリシマも庭園風に整備されていたりするので、山としての魅力を感じることはできない。この日の万歩計は23681歩。



大船山から見た由布岳遠





## 今村隆一君のこと

27日大船山に登っているときに携帯が鳴った。ザックの中であるので対応することができなかった。下山してから携帯を開いてみると今村隆一君からであった。何の用であろうと掛けてみると奥さんが出てきた。“昨日未明に主人は無くなりました。” すい臓がんであったということだ。

今村君は東京電機大学ワングル部で私より2級下であった。私を一番上にして、上原・今村・飯塚・千野など各一年ずつ学年の違うメンバーがよく気が合って、卒業後もこのメンバーでよく一緒に山登りを行った。特に1972年から1979年までは、安達太良山の山頂で新年を迎えることにしていた。これに今村君が東京家政大学ワングル部主将を務めていたことのある奥さんを連れてきて、その後二人は結ばれた。これに刺激されて両大学の卒業生の結婚が何組かあった。常に真っすぐなものを求める今村君は、若いころの私の生き方にもいろいろな影響を与えた。上原君からは“高橋さんは今村の影響が強いから”と指摘されて腹を立てたこともあった。しかし後で冷静になって考えるとその指摘は当たっていた。先輩の私がそんなことだから、後輩たちにも彼を慕う人が多かった。その後いろいろな社会活動にも興味を示して、中山千夏の主宰する会に参加したり、地元の政治家の選挙を手伝ったりすることもあったようである。一方、体を動かすことが好きな彼はバスケットボールのクラブを市内で立ち上げたりもしていたようである。

鎌ヶ谷市役所を定年になってからは、知人の紹介ということで中国吉林省の大学に留学をした。還暦過ぎのジイサマが留学なんてと笑ったものであるが、留学生活は長く続いた。最初は言葉も解らないところでの一人暮らしは苦労が多いようであったが、地元の山登りツアーなどにも参加するようになって、参加者からは中国人と思われるようにさえなったようである。持ち前のバイタリティーで克服したようだ。この何年かは中国人に日本語を教える講座を担当するようにもなっていたとのことである。留学中も春節休暇中には帰国するので、電大山岳部出身の原君などと3人で奥多摩や丹沢などの山へ行って、山上での鍋に舌鼓を打ったりした。



正月の安達太良山



中央の上が今村君下が奥さん

さすがに 70 歳を過ぎると留学という訳にもいなくなったらしく、昨年 8 月からは日本での生活になった。私がずーと使っている山登りパックツアー会社の毎日新聞旅行に彼も入会してよく一緒に山登りを行った。大菩薩嶺 (10 月)・兜山(11 月)・九鬼山(12 月)などで、いつも彼が先に予約して“こういうのに参加しますけどどうですか”とメールしてきた。彼との山登りではいつもべちゃくちゃしゃべりながら歩いた。共通して好きなボクシング・映画・小説などの他に先輩や後輩などの最近の動向などについての話が多かった。私はこの数年は山に行くとバテルのではないかと思いながら歩くようなマイナス思考になることが多かったが、べちゃくちゃのおかげで気楽な山登りができた。彼の好みは帰りに温泉が付いているものであった。ツアーの帰りには新宿の居酒屋で軽く一杯がパターンであった。本年 2 月には二人で、私の好みである八ヶ岳の夏沢鉱泉に泊まって根石岳に登った。この時に“最近体調が悪くって血圧が上がったり戻ったりするんです。でも薬を変えたら今のところ落ち着きました。”と言っていた。3 月 27 日に道志山塊の赤鞍ヶ岳に登った時のことである。“あれ以来体調が悪くって、今日も来るか止めるか直前まで迷っていました。”と言っていた。しかし山登り最中は体調の悪さなどを感じさせるようなことはなかった。医者からは「中国での長い生活が変わったことによる適応障害」と言われたという。後から聞いた奥さんの話では、4 月最初の週にすい臓がんであることが判明したとのことである。精密検査をしてみるとすでに末期の段階であったという。5 月連休明けまでは普通の生活ができていたようであるが、暗転して 26 日に帰らぬ人になってしまった。この 7 月には私の好きな南アルプスの塩見岳に一緒に行こうと言っていたのであるが、それもかなわぬものになった。これから一緒にいっぱい山登りができるものと思っていたのに、ものすごく哀しい。本当に哀しい。